



TITLE:

「国民」と「先住民」のはざまで--
ボツワナの再定住地におけるサン
のヘッドマン選出をめぐるマイク
ロ・ポリティクス (特集 地域研究
の frontline)

AUTHOR(S):

丸山, 淳子

CITATION:

丸山, 淳子. 「国民」と「先住民」のはざまで--ボツワナの再定住地におけるサン
のヘッドマン選出をめぐるマイクロ・ポリティクス (特集 地域研究の
frontline). アジア・アフリカ
地域研究 2007, 6(2): 373-395

ISSUE DATE:

2007-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/80080>

RIGHT:

「国民」と「先住民」のはざまで

— ボツワナの再定住地におけるサンのヘッドマン選出をめぐる
マイクロ・ポリティクス —

丸 山 淳 子*

Between “Nation” and “Indigenous People”: Micropolitics over the Legitimacy of a Newly Established Headmanship among the !Gui and !Gana San in Botswana

MARUYAMA Junko*

Since the 1993 International Year for the World's Indigenous People, the San have been involved in the global movements for indigenous rights. In this process, as well as in the process of integration into Botswana's national system following the resettlement program of the 1990s, each settlement is required to have a “headman,” to be elected by the residents from among themselves. The San have become interested in the issues relating to leaderships, while traditionally they are known for their “egalitarian” social relationships and sentiments. This paper aims to examine the views of “legitimate” headmanship in the !Gui and !Gana resettlements.

In the !Gui and !Gana resettlements, the genealogical relationships of the headmen and sub-headmen with *ayako*, translated as “rich person” or “headman,” often legitimate their political representation. The *ayako* were Bantu-speaking Ba-Kgalahadi people who moved into Central Kalahari, home of the !Gui and !Gana, in the late 19th century. Through the recent process of electing a headman, descendants of the *ayako* have come to be redefined as “traditional royal family” among the !Gui and !Gana people, as well as by the local government. This paper addresses specifically the problems involved in such an electoral process.

1. は じ め に

1.1 サンをめぐる開発政策と先住民運動

国連が「世界の先住民国際年」を宣言した 1993 年以降、先住民の政治参加が活発化してい

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科, Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

2006 年 7 月 31 日受付, 2006 年 11 月 7 日受理

る。従来、先住民に対して国民国家が採用したもっとも一般的な戦略は、主流社会への同化であったが、1980 年代ごろから先住民が独自の文化や生活様式を維持する「基本的な権利」を認めることが正しいとされる考え方が育ってきた。そして、国家のなかで「声なき民」であった先住民は、自らの文化的、社会的、政治的権利をもとめて、先住民運動を展開しはじめ、さまざまなレベルで積極的に国家の政治にかかわるようになってきた。南北アメリカやオーストラリアで始まったこの流れは、アフリカにも徐々に浸透しつつある。

南部アフリカの狩猟採集民として知られてきたサンも、近年では国際的に「先住民」として認められつつある。¹⁾ 国際的な潮流の後押しをうけて、サンを支援する NGO が多数誕生し、他地域の先住民団体ともネットワークを築きながら、さまざまな形で運動が始まっている。とりわけ 1990 年前後から、南部アフリカの各地で、サンのなかから政治的なリーダーを選出することに関心が高まり、サンが NGO などの代表者として政府と対話をする動きが目立ちはじめた。またサンの投票率が飛躍的に上がり、サンの議員候補も登場した [Hitchcock and Holm 1993: 329]。さらに 2000 年代に入ると、南アフリカ共和国（以下南ア）、ナミビア共和国（以下ナミビア）、ボツワナ共和国（以下ボツワナ）において、NGO 主導のもと、サンの代表者が集う評議会も立ち上げられた [WIMSA Website]。

しかし、国家レベルにおけるサンの政治参加の道のは険しい。とくに、サンの約半数が居住するボツワナでは、「われわれはみなツワナ人（国民）である（We are all Batswana）」のスローガンのもと、サンだけを「先住民」として認めること、すなわち政策レベルで「民族別に異なった扱い」をすることは、南アのアパルトヘイトの「分離政策」に通ずるとして徹底的に回避されている。その一方で、国民の大多数を占めるツワナ系民族がさまざまな形で優遇され、国民のわずか 3%を占めるに過ぎないサンは、他の少数民族であるバントゥ系のカラंगा (Kalanga) やイエイ (Yei) よりも、さらに周辺に位置づけられている。こうした民族間の序列構造は、国会 (National Assembly) と並んで国政にかかわるチーフ議会 (House of Chiefs) の構成に象徴的にあらわれている。民族の代表者としてチーフを選出できるのはングワト (Ngwato)、クウェナ (Kwena)、タワナ (Tawana) などツワナ系の 8 つの民族に限られており、それ以外の人々は、民族的な背景に基づいた政治的代表者を出すことはできない。サンなどのツワナ以外の人々は、7 つの地区の代表としてサブ・チーフを選出することができるが、この地位の多くも、サンではなくバントゥ系民族によって占められている。²⁾

1) Saugestad[2001: 43] は、国連などにおける「先住民 (indigenous people)」の最も一般的な基準として、1. 先着 (first come)、2. 非主流 (non-dominance)、3. 文化的独自性 (cultural difference)、4. 帰属意識 (self ascription) の 4 点を挙げ、サンはこれにあてはまるとしている。

2) 2000 年になってようやく、チョベ (Chobe) 地区のサブ・チーフとして、初の女性、初のサンが選出された。しかし彼女は、地区の代表に過ぎず、サンの他のグループとの連帯もないので、サン全体の代表者とはいいがたいと評価されている [Mazonde 2004: 138]。

現在のところ、ボツワナのサンが国家に認められたかたちで自らの代表者を選出し、政治に参加できるのは、地方のコミュニティのレベルでしかない。そのなかでもっとも可能性が高いのは「遠隔地居住者定住地 (Remote Area Dwellers Settlement)」といわれる再定住地 (resettlement site) のヘッドマンの地位である。再定住地は、ボツワナ政府による「遠隔地開発計画 (Remote Area Development Programme)³⁾」のもとで、全国各地に設けられ、学校や病院、老齢年金や食料配給などの福祉サービスが提供される開発計画の拠点となっている。この計画は「遠隔地居住者を主流社会に統合する」ことを目的に 1974 年に始められ、サンを主な対象として進められてきた。その結果、2002 年までに全国のサンの約 8 割が 64 の再定住地で生活するようになった。ボツワナでは、ツワナの伝統に従い、各集落から「コシ (kgosi)」とよばれるヘッドマンが選出されるが、サンが人口の大半を占める再定住地からも、これに準じてヘッドマンを選出することになっている。このヘッドマンは地方行政の一端を担うものとして公示され、報酬を得る。

再定住地は、遠隔地開発計画の開始当初から「公的なリーダーシップをもたない」住民の政治・行政上のプラットフォームの役割を果たすことを期待されていた [Gulbrandsen *et al.* 1986: 12]。1966 年のボツワナ独立以前には、多くのサンが原野で狩猟採集生活を営むか、ツワナなどの集落の周辺部や白人の経営する大農場において雑役などに従事していた。いずれのサンも地域や国家の政治に参加する機会から排除されており、独立後のボツワナ政府のなかにはこのことを問題視する声も少なくなかった。そして、再定住地にサンを集住させ、彼らからも代表者を選出させることで、サンをボツワナの国家の枠組みに編入することが可能になると考えられたのである。しかし実際にこの計画が始まると、再定住地のインフラ整備や経済活動の支援に重点が置かれ、サンのヘッドマンの擁立が積極的に推進されることはなかった。またヘッドマンが選出されたとしても、それは再定住地の住民としては少数派である、サン以外のバントゥ系住民や、再定住地以外に住むツワナ系の人々であることが多かった [Gulbrandsen *et al.* 1986: 23-26]。遠隔地開発計画はその進行とともにサンのツワナへの同化政策としての色彩を強め、結果としてツワナのヘッドマン制度を遠隔地にまで浸透させる装置として働くようになったのである。

ところが 1990 年代になると、先住民運動の活発化に呼応して、再定住地におけるヘッドマンに対するサンの関心が高まってきた。このころから再定住地のヘッドマンに就任するサンが少しずつ増加し、またヘッドマンの座に就くことで、住民の権利を主張するサンも登場しはじめた。1990 年代後半に、サンの人口がもっとも多いハンツイ・ディストリクト (Ghanzi District) の 9 つすべての再定住地で、ヘッドマンにサンが就任したことは、サンの政治参加に

3) 当初は Bushmen Development Programme としてスタートしたが、1978 年に改称した。

おける大きな躍進としてとらえられた [Cassidy *et al.* 2001: 46]. このように再定住地におけるヘッドマンの制度は、ツワナへの同化の圧力と、先住民としての権利の承認をめざす動きのはざまで、サンが手にしつつある政治参加の形態として位置づけることができる。本稿では、この再定住地のヘッドマンに焦点をあて、サンがどのようにヘッドマンを選出し、政治参加を果たそうとしているのかを検討する。

1.2 サンと政治的リーダーをめぐる先行研究

従来、サンの社会は、階層的で中央集権的なツワナ社会などとは異なり、王やヘッドマンをもたない社会として注目されてきた。リーダーシップは一時的で、居住集団内の話し合いや、離合集散をともなう居住様式などによって、意思決定や問題解決が果たされていると理解された [Lee 1979; 田中 1971; Silberbauer 1982]. この点を指して、サンの社会は「平等主義的である」といわれ、またその政治過程は狩猟採集民に共通する特徴として、多くの研究がなされた。したがって遠隔地開発計画によって導入されたヘッドマン制度に、平等主義的なサン社会がどのように対応するのかという問題にも関心が寄せられることになった [Childers 1982; Lee 1982; Hitchcock 1982]. これらの研究では、ヘッドマンには、権力を振りかざす支配的な人物は避けられ、なるべくその権力が無化されるような形式でヘッドマンが受け入れられていることが報告された。またその結果として、住民とは関係が薄い外部者や人類学者、学校教師などにヘッドマンに就任するよう依頼することも多かったことが指摘されている。

しかし Wilmsen and Denbow [1990] は、そもそも従来のサン社会を、政治的リーダーをもたない社会とみなすことに対して異議を唱えた。彼らは、サンの多くの言語集団がチーフやヘッドマンと訳せる語彙をもっていることや、Lee や Hitchcock の調査地においても、19 世紀以前にはサンのなかに政治的リーダーとよべる人物がいた可能性を指摘し、サンは古くからこうした政治組織になじんできたと主張した。この問題は、サンの狩猟採集生活の成立とその歴史的背景に関する論戦、いわゆる「カラハリ・ディベート」の一部として議論され、多くのサン研究に影響を与えた。さらに、先住民運動が活発化してくると、サンのリーダーシップの育成を推進する立場からも、サンの「平等主義社会」のイメージが問題化されるようになった。「平等主義的なサンの社会では政治的リーダーの選出ということ自体がなじまない」という理解が、サンの政治参加を阻む障害となっているというのである [Hitchcock and Holm 1993; Iuseb 2001; Felton 2002]. とくに最近ではこの問題が、ボツワナに次いで多数のサンが住むナミビアの事例をもとに議論されている。ナミビアでは「1995 年伝統的統治機構法 (The Traditional Authorities Act, No.17 of 1995)」のもとで、サンの「伝統的統治者」も公的に認定される道が開かれた。しかし、申請したサンのコミュニティのなかには歴史的に「伝統的統治者」をもっていなかったことを理由に却下されたり [Geingos 2002: 5], 「あなたたちはこれまでリーダーをもったことがなかった。それなのに、なぜ今になって必要になるのか？」と

いう言葉に阻まれるものが多いというのである [IUseb 2001: 15].

このような流れを受けて、近年では、サンの政治的リーダーを再検討する試みがなされている。他民族との交流の歴史が長く、また大規模で組織的な狩猟や交易を展開していたサンについての調査も積極的に進められるようになり、こうしたグループのなかには早くからリーダーシップを発達させたものがあることも明らかになってきた [cf. Guenther 2002; Le Roux and White 2004: 174-182]. また、サン自身や、サンを支援する NGO が、サンの「伝統的統治者」の存在や、サンに独自の政治的リーダーのあり方を再検討することも始まった [cf. IUseb 2001; Chumbo and Mmaba 2002; Le Roux and White 2004; Longden 2004⁴⁾].

これらは、サンの政治的リーダーの歴史を再検討し、サンのリーダーシップを社会的に認知させるためには大きく貢献した。しかしそれらの試みの多くが結果的に、国民国家の体制により受け入れられやすい形で、サンの政治的リーダーを提示するにとどまっており、サンがそれまで築き上げてきた独自の社会と文化を失うことなく、政治参加を可能にする仕組みを検討するところまでは、議論が及んでいない。そのためには、近年のサンの政治的リーダーの選出に際して、サン自身が自らの歴史をどのように解釈し、そこからどのようにして現在の問題に対する答えを導き出そうとしているのか、というプロセスに踏み込む必要がある。彼らが政治参加の過程で直面する問題が、「平等主義社会」から「国家社会」への移行、という単純な図式では理解できないことを明らかにしなくてはならない。

そこで、本稿では、サンのなかでもとくに「平等主義社会」の典型例として位置づけられてきたグイ (IGui) とガナ (IGana) を対象として、サンが積極的に再定住地のヘッドマン選出にかかわるようになった 1990 年代以降に、彼らがヘッドマンをどのような基準に依拠して選出しているのか、その選出プロセスのなかで、自分たちの歴史をどのように再定義しているのかを検討することを目的とする。これをとおして、グイ／ガナにおける政治的リーダーのあり方を再考するとともに、彼らが国家や国際社会に参入するにあたって、どのような問題に直面しているのかを論じたい。

2. グイ／ガナと再定住地のヘッドマン

2.1 グイ／ガナ社会におけるヘッドマンの位置づけ

本稿の対象となるグイとガナは、ボツワナ中央部のセントラル・カラハリ地域（現在のセントラル・カラハリ・ゲーム・リザーブ：以下 CKGR）を主な生活域としてきた。両者とも中部コイサン語族⁵⁾に分類され、互いの意思疎通に問題はない。狩猟採集生活を営むグイ／ガ

4) Chumbo and Mmaba[2002], Le Roux and White[2004], Longden[2004] は NGO の主導する Oral Testimony Project のサポートを得て出版されたサンの「証言集」である。

ナに関する研究は 1950 年代に始まり、彼らが集団を統率するリーダーをもたず、居住集団における話し合いによって問題を解決してきたことを指摘し、「統治者なき平等主義社会」と位置づけた [田中 1971; Silberbauer 1982]. 1980 年代になると、CKGR 内における、遠隔地開発計画の拠点となったカデ地域を舞台に、グイやガナの社会変容を扱う研究が盛んになった。カデでは、グイやガナのなかから初めて公的に認められたヘッドマンが選出されたが、大崎 [1996] らは、ヘッドマン制度は機能せず、人々の関心も低いことを報告した。

今日、グイとガナの人口は約 4,950 人で、その大半がハンツィ、ノースウエスト (Northwest), クウェネン (Kweneng)・ディストリクトにおいて、政府が設けた再定住地に居住している [Cassidy *et al.* 2001: 6]. グイ／ガナが 100 人以上まとまって居住している再定住地はコエンシャケネ (Kx'oensakene), カウドワネ (Kaudwane), ツェレ (Xere), ソメロ (Somelo), ケケニエ (Khekhenye) の 5 つである (図 1). はじめの 3 つには、CKGR における住民の立ち退き計画によって移住したグイやガナが居住している。この計画は自然保護と住民の生活改善を謳って、1997 年に実施された。残る 2 つには、CKGR の出身者ではあるが、他の地域に移

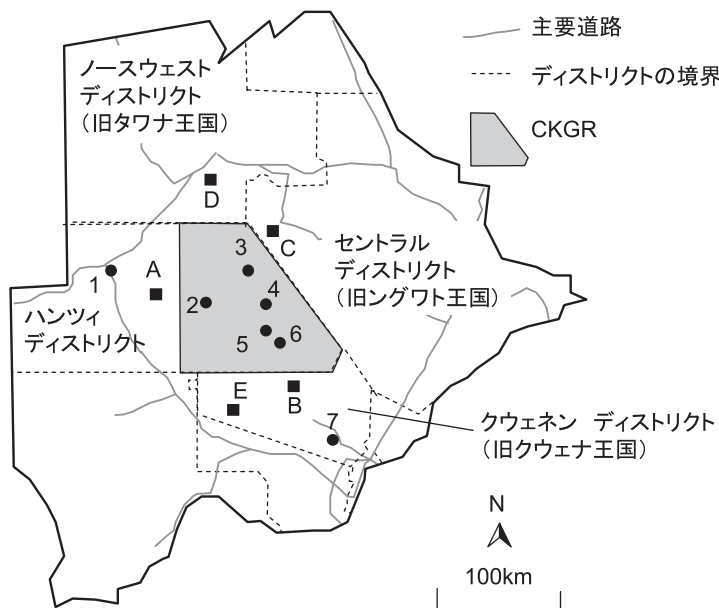


図 1 本稿に登場する地名

A: コエンシャケネ B: カウドワネ C: ツェレ D: ソメロ E: ケケニエ

1: ハンツィ 2: カデ 3: モロポ 4: カエツァ 5: モトメロ 6: キカオ 7: モレポローレ

5) サンは複数の言語・地域集団からなる。言語に注目すると, khoe と non-khoe に分けられ, 前者は中部コイサン語族, 後者はさらに南部コイサン語族と北部コイサン語族に分類される。

住してツワナなどの集落の周辺部や大農場で生活していたグイやガナが居住している。これらの再定住地はいずれも 1990 年代以降に設立されたものであるが、そのヘッドマンに関する研究や報告はほとんどない。筆者は 2003～2004 年にこれらの再定住地で調査を実施したが、カウドワネを除く 4 つの再定住地では、グイやガナと自称する人々がヘッドマンやサブ・ヘッドマンを務めており、住民もその選出には高い関心を寄せていることがわかった。

2.2 再定住地におけるヘッドマン

ボツワナでは集落の人口規模に応じてヘッドマンの数や地位が定められているが、再定住地は最も小規模な集落に区分され、1 人のヘッドマン (headman of records または headman of arbitration) を選出することになっている [MLGLH 1998]。ただしコエンシャケネについては人口が比較的多いことが配慮され、サブ・ヘッドマンの選出も認められた。再定住地におけるヘッドマンやサブ・ヘッドマンの役割は多岐にわたる。まず、ツワナの伝統に従い、集会や調停を実施したり、年金や食料の配布、居住地や農地の割り当てや承認などを行なう。さらに、現在では対外的な役割も重要である。地方政府に開発計画に関する要望を出し、国内外の NGO や国際機関との関係を築き、ときにはマスコミなどにも対応する。報酬は、年令や職歴によって異なるが、ヘッドマンに月額 3,000 プラ以上、サブ・ヘッドマンに月額 800 プラ以上の給料が支払われる。⁶⁾ また、ヘッドマンやサブ・ヘッドマンの近い親族は、開発計画がもたらす家畜や食料、賃金労働などへのアクセスが容易になることが多い。これらの現金収入や開発計画の恩恵は、従来のような狩猟採集を思うようにできず、現金経済への依存度が高くなっている再定住地の生活において、重要性を増している。

ヘッドマンの選出方法は、原則的には集落や再定住地に任されており、統一的な選挙などは行なわれない。ツワナの集落では、ヘッドマンは王や王族によって任命されたり、その集落を築いた始祖から、父系長子相続によって継承されるのが一般的である。これに対して、再定住地は、遠隔地開発計画によって設けられ、住民のほとんどがツワナ以外の民族であるため、このような選出基準が適用できない。しかし、その選出に対する明確な指針は提示されておらず、そのことがサンのヘッドマンを選出する基準に混乱と議論を巻き起こしている。

2.3 「アヤコの系譜」あるいは「トラディショナル・ロイヤル・ファミリー」

CKGR からの移住者が最も多いコエンシャケネの人口は約 1,500 人で、その大半はグイやガナである。再定住地が設立された 1997 年に、行政官の指導のもとで住民の全員参加による投票が行なわれ、新たにヘッドマンが選出された。さらに 2002 年には言語集団や出身地域に応じて設けられた 6 つの居住区ごとに、サブ・ヘッドマンを選出することが認められた。サブ・ヘッドマンについては、選挙のかたちをとらずに「話し合い」によって選出するように要

6) 2004 年当時、1 プラは約 25 円であった。

請された。その結果、サブ・ヘッドマンには「ケイギョム」や「ペディ」、「カエン」などという名前の人物と系譜関係にあるものが選ばれたという。⁷⁾たとえば「ガナ居住区」のサブ・ヘッドマンには、カデでヘッドマンを務めていた男性が就任したが、彼はケイギョムと系譜関係にあるという。また、投票によって選出されたヘッドマンについても、「ゴゴ」という名前の人物との系譜関係が強調されることが多い。このように言及される人物はみな、グイ／ガナ語で富裕者という意味をもつ「アヤコ (ayako)」とよばれる人々である。「アヤコ」は、また「ヘッドマン」と訳されることもある。そして、「(サブ・) ヘッドマンにはアヤコの系譜をひくものが就任する」といわれていた。

この説明は、他の 3 つの再定住地でも聞くことができた。ツェレはコエンシャケネと同様に CKGR から立ち退いた人々のために、2002 年に設けられた再定住地である。人口は 100 人程度で、その大半が CKGR 東部から再定住したガナである。ツェレのヘッドマンもまた「アヤコ」との系譜関係を具体的に遡ってみせた。ケケニェは 1991 年に設立され、住民は約 300 人、その約半数がグイ、残る半数は南部コイサン語族に分類されるサンである。再定住地の設立にともなって就任したヘッドマンはグイの男性で、「アヤコ」との系譜関係があるという。またケケニェに住む行政官は、彼が「アヤコ」の子孫であることを指して、「グイのトラディショナル・ロイヤル・ファミリーの一員である」と説明した。「トラディショナル・ロイヤル・ファミリー」とは、ツワナの王族に対して一般的に使われる表現である。ソメロ再定住地は 1997 年に設けられた。人口 300 人のうち、100 人程度がガナであり、その他には同じ中部コイサン語族に属する複数の言語集団が居住している。2004 年の時点では、ヘッドマン選出について合意が得られず、暫定的なヘッドマンがいるのみであった。暫定ヘッドマンであるガナの男性も、自分が有力なヘッドマン候補である理由を、「アヤコ」との具体的な系譜関係によって説明した。さらに遠隔地開発計画を担当する行政官も、彼が「トラディショナル・ロイヤル・ファミリー」の出身なのでヘッドマンに適していると説明した。

このように、グイやガナが住む 4 つの再定住地で共通して、ヘッドマンやサブ・ヘッドマンの選出基準として、「アヤコの系譜」が言及された。また「アヤコの系譜」をひくものたちを指して、グイやガナの「トラディショナル・ロイヤル・ファミリー」という表現も聞かれた。しかし、従来、グイやガナの社会は、ヘッドマンなどのリーダーをもたない平等主義的な社会として描かれてきた。また「アヤコ」のような特定の人物との系譜関係が重視されたり、リネージやクランなどの出自集団を形成することはなく、親族関係は本人を中心として同心円状に広がるといわれてきた [田中 1971]。それでは、この「アヤコの系譜」とは、いったいど

7) 「モトメロ・キカオ居住区」のサブ・ヘッドマンについては、本人およびその関係者が調査時にコエンシャケネを長期不在にしており、聞き取りを行なうことができなかった。

のようなものなのだろうか。

3. 「アヤコ」となったバカラハリ

3.1 セントラル・カラハリ地域におけるグイ／ガナとバカラハリの歴史

「アヤコの系譜」とヘッドマンの関連について、最初に指摘したのは大崎 [1996] である。彼は 1979 年にカデにおいて選出されたヘッドマンについて、20 世紀初頭までにこの地域に移住してきたケイギョムという名の、ツワナあるいは、バントゥ系のバカラハリ⁸⁾ (Ba-Kgalahadi) の出身の男性が「アヤコ」とよばれていたこと、彼から数えて 3 代目⁹⁾ にあたる男性がヘッドマンに就任したことを報告している。筆者の調査では、ケイギョムの他にも複数の人物の名前が「アヤコ」として挙げた。ヘッドマンやサブ・ヘッドマンはみな、これらの「アヤコ」との系譜関係を具体的な個人名や親族関係をともなって遡ることができ、住民のあいだにも「アヤコ」に関するさまざまなエピソードが残っていた。こうしたことから「アヤコ」について検討すると、彼らが、現在の人々から数えて 4～5 世代前の世代にあたり、19 世紀後半にセントラル・カラハリ地域で生活していたバカラハリであることがわかった。

バカラハリとは、現在の南アにいたツワナ系民族の祖先から、1400 年ごろに分岐して、ツワナよりも先に、現在のボツワナに移住してきた人々を指す総称であり、「カラハリに住む人々」を意味するツワナ語に由来する [Okihiro 2000: 115-116]。バカラハリは、1500 年ごろまではボツワナの南西部に居住していたが、1800 年ごろまでにボツワナの北西部や南東部へと、居住域を拡大していった。さらに 1850 年前後になると、より多くのバカラハリがセントラル・カラハリ地域へ移入し、定着するようになった。近年、活発化している、セントラル・カラハリ地域のサンの歴史研究 [cf. Ikeya 1999; 大崎 2001; 峯 2005] は、この時期に移住してきたバカラハリが、グイやガナとさまざまな形で相互交渉をもってきたことに注目している。

19 世紀半ばに、多数のバカラハリがこの地域に定着した背景には、まず「ディフェカネ (*difecane*)」があった [Solway 1987; Esche 1977]。ディフェカネとは「衝突」を意味するソト語で、1815 年ごろに、現在の南アのズールーの王シャカが周辺民族を征服し、強大な王国を築いたことに端を発して、南部アフリカで繰り広げられた一連の諸民族の離合集散を指す [宮本・松田 1997: 368-371]。ボツワナでは 1823 年に最初の衝突があり、その結果、バカラハリもまた、環境条件の厳しいセントラル・カラハリ地域へ逃げ込んだのである。もうひとつの要因としては、クウェナ王国が貢納制度と、それに基づいた狩猟産品の輸出を始めたことが

8) 本来なら、「ツワナ」や「クウェナ」のように人を示す接頭辞 Ba をはずした表記にならって、「カラハリ」と統一すべきであるが、ここでは、地名の「カラハリ」との混同を避けるために、「バカラハリ」と表記する。

9) 正確には 4 代目にあたる。

挙げられる [Esche 1977; Ikeya 1999; 峯 2005; Okihito 2000]. ツワナの一グループであるクウェナは 18 世紀初頭までにカラハリ南東部に到来し、1820 年代に貢納制度を開始した。やがてイギリスによる植民地徴税システムの導入などにもとない、王国独自の貢納制度は禁止され、1940 年代には終焉を迎えた [峯 2005]. この貢納制度のもとで、セントラル・カラハリ地域に居住するバカラハリは、地元のサンを動員して狩猟産品を集め、クウェナの王国に納める役割を担っていた。

現在ヘッドマンやサブ・ヘッドマンがその正統性の根拠とする「アヤコ」は、このようなバカラハリの有力者であったようだ。とくに「ケイギョム」「モエラルリ」「ペディ」という名前の「アヤコ」やその子どもたちについては、多くのエピソードが残されており、歴史研究 [Ikeya 1999; 大崎 1996] においても注目されてきた。これらの「アヤコ」はクウェナ王国に正式に組み込まれたわけではなく、いつでも離脱が可能であった [峯 2005] が、Ikeya [1999] と大崎 [1996] は、彼らがセントラル・カラハリ地域におけるヘッドマンやチーフの役割を果たしていたと指摘している。まず「ケイギョム」については、牧畜や農業をこの地域に伝え [大崎 2001: 96-99], 貢納物をサンから集めていた人物 [Ikeya 1999: 25-26] として記載されている。ケイギョムが、たくさんの家畜を飼っていたこと、多くの女性と結婚したこと、この地域外と強いコネクションをもっていたことなどは、現在でもよく語られる。また「モエラルリ」は「*kgosi Basarwa* (サンのヘッドマン)」あるいは、彼のトーテム¹⁰⁾ に由来して「ターペ (魚)」とよばれていたという。Ikeya [1999: 26] がとりあげたコウピという名前の、クウェナ王国の王都モレポローレに毛皮を納めたり、ヤギを飼養していた人物は、モエラルリの息子である。コウピとともに狩猟をした経験をもつグイの男性の話では、モエラルリもコウピも銃で動物を狩り、大量の毛皮を集めていたようだ。「ペディ」は、バカラハリのペディ (ハイエナ)・トーテム出身の男性であった。セントラル・カラハリ地域に最初に移入してきたバカラハリはハイエナ・トーテムの集団で、狩猟採集にも適応した生活をしていたという [Kent 2002: 57] が、ペディはこの集団の一員だったと推察できる。Ikeya [1999: 26] によれば、ペディの息子であるプウテもまた貢納に従事し、牛と銃をもっていた。このように外部から移入してきたバカラハリが、いかにしてグイやガナに取り込まれ「アヤコの系譜」を形成するにいたったのか、以下ではグイ／ガナとバカラハリの関係を検討する。

3.2 セントラル・カラハリ地域におけるグイ／ガナとバカラハリの関係

貢納制度の時代には、「アヤコ」と彼らに雇われて狩りをするサンとの関係は対等ではなかった。グイやガナの言葉でバカラハリのことを「テベ (*†kebe*)」といい、この対語としてグ

10) 一般にトーテムは動物であることが多く、「*ba bina* 動物名」とあらわされる。*Bina* とはダンスのことで、その動物のダンスを踊る人々という意味になる。ツワナなどと同様に父から子へと受け継がれるが、それ以外にも共住を契機に、そのトーテムに加わることもなどもあるという。

イ／ガナのことを「クア (*kua*)」という。テベとは広義には、ツワナも含めたバントゥ系諸民族を指し、クアとはサン一般を指すが、さらにテベには主人、クアには従者という含意もある。しかしグイ／ガナは、自分たちがバカラハリあるいはクウェナ王国の王の臣下であると考えていたわけではなかった [大崎 1996: 267-268]。またクアとテベのあいだに婚姻関係が生じることも、けして珍しくはなかった。「テベの男は、たくさんの女たちをめとり、子どもをもうけた。女たちのなかにはクアもいた」というように、テベ男性とクア女性のあいだの、いわゆる昇婚がみられただけでなく、「テベはお気に入りのクアがいれば、遠くへ行かないように自分の娘や妹と結婚させたこともあった」という。とくに「アヤコ」は、グイ／ガナとのあいだに多くの子孫をもうけたようだ。

やがて植民地化の過程で貢納制度が廃止されると、仲介役を担っていた「アヤコ」はクウェナ王国から徐々に切り離されていく。この過程は一方で、「アヤコ」が、サンに取り込まれていく過程でもあった。1940年代以降、「アヤコ」やその子孫たちは、他のサンと同様に狩猟採集に強く依存した生活を送るようになった。この地域で人類学的な研究が行なわれた1960年代には、バカラハリの血をひく人々も、グイ語やガナ語を話し、他のサンとほとんど変わらない生活をしていたことが報告されている [田中 1978: 34]。また1960年代にセントラル・カラハリ地域中央部に居住していた人々の家系図を復元した Ikeya [1999: 28-29] は、1世代目はバカラハリであったとしても、2世代目にはバカラハリとサンが混血し、3世代目以上はサンと認識されている例について報告している。そして混血から年月がたつにつれて、バカラハリよりもサンとしてアイデンティティをもつ者が増えたという。また池谷 [2004] は、バカラハリとサンの関係は地域や時代によって多様であるが、1960～70年代にかけて、セントラル・カラハリ地域の多くの地域で、バカラハリの文化の影響が少なく、サンの自律性が高い「ブッシュマン卓越型」がみられるようになると指摘している。さらに1970～80年代の報告には、この地域の人々はサンやバカラハリとしてよりも、「砂漠の民」[Sheller 1977: 2] や「セントラル・カラハリ地域の住民」[English 1980: 8] として共通のアイデンティティをもつという指摘もある。¹¹⁾ このようにセントラル・カラハリ地域においては、サンとバカラハリの通婚が繰り返されたり、また貢納制度が終了したことで、当初は明確であったグイ／ガナとバカラハリの境界が、しだいにあいまいになっていった。これは、他の地域ではバカラハリとサンの通婚が回避され、貧富の差が大きく開いた両者が、パトロン－クライアント関係を築いていた [Esche 1977] のとは対照的である。

11) とくにセントラル・カラハリ地域の西部ではバカラハリと系譜関係をもつもののほとんどが、グイ／ガナと変わらぬ生活を送り、グイ／ガナのアイデンティティをもっていたようだ。東部では、バカラハリのアイデンティティを維持しているものもあり、これらはコエンシャケネへの移住に際しても「バカラハリ居住区」を選択している。

こうした歴史的経緯を反映して、今日でもグイやガナは、クアとテベというカテゴリーを、単純な二項対立的な上下関係として表象するだけでなく、その両者を連続的なものとして考えることが多い。「よりテベである」「少しクアである」といういい方はしばしば聞かれ、クアとテベのあいだに生まれた子孫を指す「コバ」という言葉もある。コバとは野生化した栽培スイカを意味し、野生スイカに喩えられるクアと、栽培スイカに喩えられるテベの中間的存在であるというのだ。さらには、バカラハリとの混血も含むグイやガナを、「先祖」との系譜関係に応じて細分化し、その「先祖」がクアであるかテベであるかに応じて本人の属性を定めることもある。これを、グイ／ガナ語では、「カオ (*ikhao*)」とよぶ。「カオ」とは広義には「民族、集団」などを意味するが、この「先祖」との系譜関係を問題にするときにもっともよく使われる。たとえば A という「先祖」に由来する子孫たちはみな、「A」あるいは「A の孫」、「A の家のもの」などとよばれ、この A を指して「カオ」という。表 1 にコエンシャケネにおいて、人々が「カオ」として挙げたものを示した。¹²⁾それぞれの「カオ」を分析すると、「先祖」が生活していた場所の地形や景観に由来し「...というところに住む人」といった意味のもの¹³⁾と、「先祖」自身の個人名やあだ名に由来しているものがあることがわかった。前者は、ある程度まで系譜を遡ることはできても、「先祖」には行き着かない。一方、後者は「先祖」に至るまでの系譜を、具体的な個人名や親族関係をともなつて遡ることができる。そして前者の「先祖」はクアであり、後者の多くはテベであったという。従来、ガナが「グイとバカラハリの文化の交差するところにある」[Sheller 1977: 5]といわれていたが、グイにもターペやペディといったテベの「カオ」をもつ人々がおり、バカラハリとの婚姻関係はグイ／ガナの双方でみられたことにも注意しておきたい。

「カオ」は、父系・母系を問わず引き継がれるため、原理的には個人は世代を遡るにつれて無数の「先祖」とつながりをもつことになる。自分のもつすべての「カオ」を正確に記憶している人は稀であるが、状況に応じて「カオ」を使い分けることで、多くの人が自らをクアともテベとも称することが可能になる。そしてこの「カオ」のなかでも、とくに有力なテベの「カオ」に由来するいくつかの系譜が、ヘッドマンやサブ・ヘッドマンを選出する際に、「アヤコの系譜」といわれて、取りざたされているのである。

12) 「カオ」は、従来のグイやガナの社会では言及されることが少なかったようで、先行研究においてはほとんど触れられていない。菅原 [1998: 84, 99, 129] の会話分析の事例中に、「ターペ」や「カイコ」という表現が登場したり、Traill and Nakagawa [2000] が詳細は不明であるとしつつも、「ツァーコ」や「ツウイ・ツァムカ・ガム」というよび名の存在を指摘しているのみである。今日、とくに人口の密集した再定住地では、カオは頻繁に話題に上る。また、同じ「カオ」をもつ人々どうしが、状況次第では、まとまりをもった集団としてあらわれることもしばしばあるが、これについての詳細な検討は、別稿で試みたい。

13) グイやガナもそれぞれ「藪に住む人々」「湧き水のあるところに住む人々」という意味をもつ。このことも含めて、地形や景観に基づく「カオ」については、個人名に基づく「カオ」とは別に、さらに詳細な検討が必要である。

表1 コエンシヤケネ住民の「カオ」一覧

名前	読み	意味	人名・トータム/ 地形・景観	クア/テベ	言語	ヘッドマン/サブ・ヘッドマン
pedi	ペディ	ハイエナ	トータム (バカラハリ)	テベ	グイ	コエンシヤケネのサブ・ヘッドマン
tape	ターペ	魚	トータム (バカラハリ)	テベ	グイ	ケケニエのヘッドマン
qx'aë	カエン	ハゲタカ	トータム (バカラハリ)	テベ	ガナ	コエンシヤケネのサブ・ヘッドマン
googo	ゴーゴ	ツチブタ (のいると ころ)	人名	テベ	ガナ	ツェレのヘッドマン
keegyom	ケイギョム	怒って首をくくらせ た	人名	テベ	ガナ	コエンシヤケネのヘッドマン
menanoka	メナノカ	?	人名	テベ	ガナ	コエンシヤケネのサブ・ヘッドマン
lgoalnare	ゴアナレ	幅の広い足	人名	テベ	ガナ	ソメロの暫定ヘッドマン
chooxo	チョーホ	うろに水がたまる木	人名	テベ	ガナ	コエンシヤケネのサブ・ヘッドマン
lxoo lkao ts'aō	ツォウ・カオ・ ツァオン	ゲムズボック (の) 肉置き場をつくる	あだ名	クア	グイ	
lkui lkam ka lgam	ツウイ・ツァムカ・ ガム	1日だけ (手伝う) のが好き	あだ名			
lqoo #ʔoō	ツォートオン	ちよっとつまんで、 食べる	人名			
lnoalnao	ノアナオ	ダイカーを隠す	人名	クア	グイ	
lqhari lnare	カリナレ	足にアカシアのとげ がささる	人名	クア	グイ	
lqaako	ツァーコ	枯れ川のところに住 む人	地形・景観	クア	グイ	
#khaa ko	ターコ	水溜りのあるところ に住む人	地形・景観	クア	グイ	
laiko	カイコ	!ai という樹木のある ところに住む人	地形・景観	クア	ガナ・グイ	
#kaako	アーク	木のない草ばかりの ところに住む人	地形・景観	クア	ガナ	

4. 「アヤコの系譜」の実体化：コエンシャケネにおけるサブ・ヘッドマン選出過程

「アヤコの系譜」がどのようにして「ヘッドマンの系譜」あるいは「トラディショナル・ロイヤル・ファミリー」として見出され、実体化されてきたのかについて、本節ではコエンシャケネの事例に基づいて検証する。2003 年 1 月に、「ガナ居住区」のサブ・ヘッドマンであった CR¹⁴⁾ が病死した。彼はカデのヘッドマンを務め、コエンシャケネに移ってからは、「ガナ居住区」の初代サブ・ヘッドマンとなった。彼の死をうけて、コエンシャケネにおいて、初めての（サブ・）ヘッドマンの継承問題が生じたのである。「ガナ居住区」には、再定住の手続きの際に「ガナ」と申告した人々が居住している。ここにはテベの「カオ」であるケイギョムとゴゴ、さらにクアの「カオ」であるターコを名乗るものが多い。¹⁵⁾ 調査当時、「ガナ居住区」には約 60 の居住用プロットがあり、それぞれのプロットに 1, 2 世帯が居住していた。居住区の住民同士は親族関係や姻族関係をもっているが、居住区の区分は、日常的な食事の分配や生業における協力関係を、十分に反映したものではない [Maruyama 2004]。

新たなサブ・ヘッドマンの選出にあたっては、地方政府から「話し合って、候補者を挙げるように」という要請があった。人々は、CR の家や、酒場や家畜用の水場などで、このことを頻繁に話題にした。候補者として最初に名前が挙がったのは、CR の息子 KT と娘 am で、2 人は中学校を卒業し、行政官との交渉などでも活躍していたことが評価された。同時に彼らは、「アヤコ」であったケイギョムの末裔としても支持された。さらに、1979 年に CR がヘッドマンに任命された経緯も、あわせて話題になった。すなわち、行政官が「アヤコ」の系譜をひく CR をヘッドマンとして認めたこと、CR 自身が少ないながらも家畜や耕地をもっていたことが盛んに話されていた。また CR の父であったスカラブエも多数の家畜や広大な耕地、そして複数の妻をもっていたことがとりあげられ、そうした「アヤコ」の性質が、ケイギョムからスカラブエをとおして、CR に受け継がれたといわれた (図 2)。

つづいて生前の CR とは疎遠であった人々のあいだから、野生生物局に勤める DA と、牧師で NGO に勤める DN の名前が挙がった。2 人ともケイギョムの系譜をひいている。この 2 人は職業柄、行政官などとも親しく、再定住地のオピニオン・リーダー的存在であったが、彼らがこのように「話すことに長けているのは、ケイギョムの性質を受け継いでいるからだ。ケイギョムもまた人々との交渉がとてもうまかった」ともいわれていた。さらに彼らが正統

14) 個人名については、男性は大文字、女性は小文字のアルファベット 2 文字に略す。

15) ガナがまとまって住んでいる居住区はこのほかに、出身地域に基づいて区分された「モラボ居住区」と「カエツァ居住区」があるが、前者にはカエンとチョーホ、後者にはメナノカとカイコを「カオ」としてもつものが多い (表 1)。このように、出身地域によって、「カオ」が異なるのは、それぞれの「カオ」が、CKGR 内の各地域に、大まかに対応するからであるが、この問題については、注) 12 とあわせて改めて検討したい。

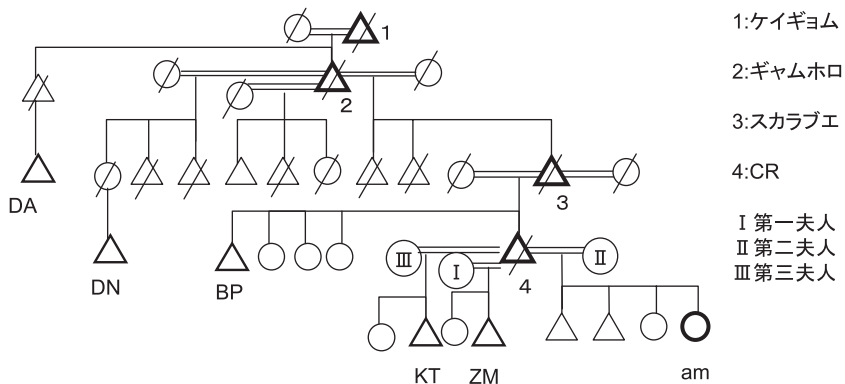


図2 コエンシャケネ「ガナ居住区」のサブ・ヘッドマンをめぐる系譜関係

な候補者であることは、ケイギヨムとの系譜関係からも説明された。まず DA を支持する人は、彼が CR のオジにあたり、CR よりもケイギヨムに近い世代であることを指摘した。一方、DN を支持する人は、彼の祖母がケイギヨムの息子の第一夫人であったことを指摘した。そして DN のオジがカデのヘッドマンに就任することを遠慮したために、CR が任命されたのであり、本来なら DN の方がケイギヨムの正統な後継者であるという説明がされた (図 2)。

候補に挙がった 4 人は、サブ・ヘッドマンの職に関心を示しつつも、自らは積極的に立候補の意思は示さず、「話し合い」は収斂しなかった。2003 年 10 月になると、ついに遠隔地開発計画の行政官がコエンシャケネを訪れ、候補者を絞るためのミーティングがひらかれた。そこで行政官は、ケイギヨムの家系を、ガナの「トラディショナル・ロイヤル・ファミリー」とよび、またケイギヨムから CR にいたる系譜を「アヤコの正統な系譜」とし、傍系にあたる DN や DA を候補者からはずした。さらに、ツワナのヘッドマンが父系長子相続であることに倣い、CR の第一夫人の長男である ZM も候補者として追加し、前述した KT, am とあわせて 3 人のなかから話し合って選出してはどうか、と提案した。すなわち、行政官はツワナのヘッドマンの制度と継承のルールに則ったかたちで、候補者選びの方向性を示したのである。

3 人の候補者は行政官の前によばれ、ZM と am は「考えてみる」と答えた。KT は、現在、自分の勤めている水場管理の仕事のほうが給料が高額であることを理由に就任を希望しないと答えたが、結論は保留された。ミーティングの後、ZM は酒場で「行政官の言うように、自分の母が第一夫人なので、自分になるべきだ」と話した。これに対して年配の女性たちが異議を唱えた。すなわち CR と最初に結婚した女性がはやくに亡くなったので、その妹であった am の母が、あとを継いで結婚することになっていた。しかし、当時 am の母はまだ幼かったために、すでに成人していた ZM の母と先に結婚したのであり、本当の第一夫人は am の母の方だ、というのである。このように以前はあまり問題にならなかった婚姻関係の経緯までが詳

細に掘り起こされ、さらには候補者の能力や素質をめぐる議論も交わされた。ZM は学校を卒業しておらず、読み書きができないことが問題視され、一方 am については、都市部で生活していたので、住民のことをよく知らないのではないかという意見や、独身の若い女性であるから、結婚や離婚の揉めごとの解決ができるとは思えないという声もあがった。また、am は近い親族が集まっている場で、CR の遺産のうち、第一夫人の息子 ZM が家畜を、第三夫人の息子 KT が現金を相続したことを指して、第二夫人の子どもの自分たちだけが何も受け取っていない、したがって自分がサブ・ヘッドマンの座を得るべきだと話すなど、行政官の提示したヘッドマン継承のルールとは異なる論理も展開された。いずれも「アヤコ」との系譜関係を前提とはしているが、性や年齢、実務能力にくわえて、母親の地位や相続の公平性などさまざまなことが議論されたのである。

そのなかでもとくに年配の人々のあいだでは、候補者 3 人がみな 20~30 代の若者であることを問題視する声が大きくなっていった。人前で話をし、人々の考えをまとめるには年長者が適しているというのである。そこで、CR の弟である BP を、候補者として追加することが模索された。BP ならば、ケイギョムから CR にいたる系譜を重視する行政官にも受け入れられそうだということが考慮された結果である。学校教育を受けた若い世代を好む行政官が、CR の長男だという理由で、学校を卒業していない ZM を候補者に推した、それならば読み書きのできない BP でも、「アヤコの正統な系譜」をひいていけば、候補者として認められるかもしれないという意見が出るなど、行政官の意向が意識された発言もあった。

2004 年 12 月には KT, ZM, am そして BP が集められ、改めて話し合いがなされた。BP も候補者としてこの話し合いに加わることが事前に打診され、彼も参加することとなったのである。この話し合いには、これら候補者 4 人に加えて、行政官 3 人とヘッドマンや他のサブ・ヘッドマンが同席し、am がサブ・ヘッドマンに就任することが決定された。まず、本人の意向に沿って KT と BP がはずされ、am が学校教育を受け、行政に関する知識もあったことから選ばれたということである。

以上のように、サブ・ヘッドマンの継承に際して、候補者や支持者、あるいは行政官のさまざまな思惑がせめぎあうなかで、「アヤコの正統な系譜」が実体化されていったことがわかる。1979 年に CR がヘッドマンに選出された当時、彼が「ケイギョムの子孫」であることが、どれほど重要視されたのかはわからない。しかしグイ／ガナの近年の歴史のなかで、新たに導入されたヘッドマンにもっとも近い役割を担っていたのは、バカラハリの「アヤコ」であった。そしてその「アヤコ」と系譜関係があり、当時としては珍しく家畜や耕地をもっていた CR [田中 1978: 162-173] は、ヘッドマンの地位にふさわしい人物であるとみなされたのであろう。一方、ツワナのヘッドマンの制度をモデルとする遠隔地開発計画の行政官にとっても、ケイギョムがツワナの王国に毛皮を貢納していたバカラハリであったことは、彼の系譜を正当な

「ヘッドマンの系譜」として承認するにあたって、都合がよかったと思われる。そして CR がこの地域で初の公的なヘッドマンとして認められたことは、「アヤコの系譜」がヘッドマンの正統性を保障するものとして対外的に説得力をもつものであることを、改めてグイ／ガナに知らしめることになったのである。

とはいえ、大崎 [1996] によれば、CR がヘッドマンになった当時、多くの人々にとって、「アヤコ」に対する認識は希薄なものであった。ヘッドマンとしてどのような人物が適任かということが議論されるようになったのは、1990 年代半ばになってからであったという。この頃には、CKGR からの立ち退きに対して、国際的な先住民運動の応援を受けた反対運動が活発化していた。すなわち、グイやガナにとっても政治的リーダーの重要性が強く認識されはじめた時期でもあった。立ち退きが実施されるとコエンシャケネでは、サブ・ヘッドマンまでもが制度化され、こうした地位への関心はさらに高まった。このような経緯のなかで、「アヤコの系譜」は、以前にまして意味をもつものとなったと考えられる。貢納制度が終了してから半世紀が経ち、「平等主義的な」グイ／ガナの社会のなかに埋没するかに思われた「アヤコ」とその系譜が、改めて浮上し、注目を集めたのである。

ケイギョムの子どもや孫たちは、多少はテベに近い生活をしていたものの、制度化された「ヘッドマン」の地位にいたわけではなく、ましてその地位が特定の系譜に従って継承されてきたわけでもなかった。歴史的にみて、はじめからガナのなかに唯一の正しい「ケイギョムの系譜」があったのではなく、ケイギョムとの系譜関係を主張できる住民は多数存在した。ところが、サブ・ヘッドマンの選出のプロセスが進むにつれて、「先祖」の名前や系譜関係、それにまつわる歴史的事象が想起され、それらに独自の意味が付与され、語りなおされることで、「アヤコの正統な系譜」が改めて整えられ、明確にされていった。そして、最終的にはケイギョムから am にいたる系譜が、行政官のお墨付きを得ることで、ガナの「サブ・ヘッドマンの正統な系譜」として実体化されたのである。

しかし、その選出の過程は、「アヤコの系譜」というツワナ社会に受け入れられやすい枠組みを用いつつも、ツワナのヘッドマンや王のそれとは、明らかに異なるものであった。まず、住民たちによって語られる歴史は、彼らの実体験に基づいたものがほとんどで、CR や、その父スカラブエの世代にまつわるものばかりであった。直接会ったことのないケイギョムやその息子のギャムホロについては (図 2)、話題にのぼることも稀で、とくにギャムホロについては、系譜をたどる際に抜け落ちることすらあった。この点で「アヤコの系譜」は、歴史を深く遡り、歴代の王を継承の順に正確に記憶するツワナの「トラディショナル・ロイヤル・ファミリー」とは異なり、他のサンズの歴史とのかかわり方と同様に [Suzman 2000: 136-138]、現在と近い過去に関心が集中し、あくまで具体的で直接的な社会関係に基づいていた。

また住民の話し合いでは「アヤコとの系譜関係があるからサブ・ヘッドマンに適している」

というだけでなく、「彼はサブ・ヘッドマンに適した能力がある。したがって、彼こそがケイギョムの性質を受け継いだものである」という因果関係を倒立させた論法も展開されていた。今日の（サブ・）ヘッドマンとして必要とされる能力をもつ適任者であることの理由づけとして、事後に「アヤコ」との系譜関係が用いられることも多かった。すなわち、ツワナの父系長子相続のような系譜のルールに従うのではなく、グイ／ガナが従来築いてきた親族関係のあり方、すなわち父系にも母系にも等しくたどることができ、本人を中心として同心円状に広がる親族関係〔田中 1971〕を基盤として、自分たちの代表者にふさわしい人を選出するために、自在に系譜関係がたどられていたのである。このように「アヤコの系譜」は、一見それまでのグイやガナの社会では重視されていなかった「出自」や「系譜」の原理に基づいているようにもみえるが、その内実は、彼らがこれまで培ってきた歴史意識や親族関係のあり方を踏襲するかたちで展開されていた。

5. お わ り に

イギリス植民地政府は、アフリカのどの「未開社会」にも「部族」の成員を統率する「首長」がいるとみなして、そうした「首長」を行政に組み込むこと、すなわち間接統治を、植民地支配の原則としていた。その結果、アフリカの各地で、従来その社会には存在しなかった「首長」が創られたことが報告されている〔cf. 松田 2005; 永原 1992〕。ボツワナでは、ツワナ系民族の王や地方のヘッドマンが「部族の伝統的支配者」として制度化され、統治機構に組み込まれた。王やヘッドマンは植民地行政の一端を担い、独立後も国家機構の一部として支配の体系を維持してきた。しかし植民地政府は、サンを正式な「部族」と認め、「首長」を探し出すことはしなかった。ツワナのいずれの王国からも遠く、辺境のセントラル・カラハリ地域に住むグイやガナは、ついに植民地政府に捕捉されることなく独立を迎えた。彼らは貢納制度を通じて間接的にツワナの王国と関係をもっていたが、それが終了すると、外部からほとんど注目されない存在となっていたのである〔峯 2005: 20〕。しかし植民地主義的な住民統治は独立後のボツワナ政府に継承され、やがてその影響が遠隔地開発計画をとおしてサンの社会にまで及ぶようになった。再定住地のヘッドマンの制度は、このような状況において、グイやガナの社会に導入された。すなわち、この制度によってサンはようやくボツワナ国家の体制に「国民」として組み入れられることになったのである。

このようなヘッドマンの制度に対して、グイやガナは、こうした支配の側の論理を取り込み、それに基づいて自らの歴史を再解釈することによって対応した。彼らがボツワナ国家の体制のなかで、政治参加を阻む「平等主義社会」のイメージを乗り越えて「声をあげる」ためには、それが国家から認められる数少ない方法だったからである。彼らは「アヤコの系譜」を自分たちのなかに見出し、それに対して行政官から「トラディショナル・ロイヤル・ファミリー」

として承認を得ながら、自分たちのなかから（サブ・）ヘッドマンを選出したのである。¹⁶⁾ しかし、それは単にツワナの社会にみられるヘッドマンの制度やその継承のあり方をそのまま移植したものではなかった。セントラル・カラハリ地域で培われてきたクアすなわちサンと、テベすなわちバカラハリの特有な関係が「アヤコの系譜」を生み出し、さらに父系にも母系にも自在にたどりうるグイ／ガナの親族関係のあり方が系譜解釈に応用されることで、「アヤコの系譜」が形作られていった。バカラハリにルーツをもつ「アヤコ」の子孫を、グイやガナの代表者として選出するというこの行動は一見矛盾してみえる。しかし、クアとテベのあいだの両義的な存在である「アヤコ」の子孫には、サンが政治参加をするうえで直面する問題への解決法が示されている。「アヤコ」の子孫は、一方でテベとみなされることで、他のサンから差異化され、（サブ・）ヘッドマンとして選出され、他方でクアとみなされることで、バカラハリではなく、グイやガナの代表者となり得たのである。またテベともみなせる彼らを、（サブ・）ヘッドマンの地位に据えることによって、ヘッドマンの制度を「平等主義的な」グイ／ガナの社会から外部化することが可能となる。現金収入や政治的権力へのアクセスの機会が多い（サブ・）ヘッドマンの地位を、テベの領域に押し出し、残る大半のクアから分離することによって、住民のあいだからこうした地位への妬みや不満が噴出することが避けられているともいえる。実際、ヘッドマンやサブ・ヘッドマンの地位にあるものに対して、「彼は（わたしたちクアとは異なる）テベだから」と言って、彼らをテベとして差異化する表現は日常的に聞かれるようになった。このように「アヤコの系譜」の論理は、「国家の論理」と自分たちの社会にある「平等的な感情」のあいだの矛盾の解決を導くものでもあった。

再定住地のヘッドマンの選出には、国家や行政官が強く関与していたが、その動きは先住民運動の活発化とも互いに呼応しあっている。「アヤコの系譜」の論理は、近年、先住民運動においても、積極的に用いられ、急速に広まりつつある。たとえばチーフ議会の構成員見直しを目的とした集会がコエンシャケネで開かれたとき、ある住民は、自分たちにもチーフが必要だ、そして「自分たちのようにバカラハリの系譜をひいているサンにとって代表者を選ぶのは簡単である」という意見を述べ、新聞にも取り上げられた [*Botswana Daily News*, October 3, 2000]。また CKGR からの立ち退きを先住民の権利の侵害として裁判が起こされたが、そのリーダーは、自分がカエンという「アヤコ」の系譜をひくものであることにしばしば言及している。彼が CKGR 住民を代表する適切な提訴者であることを示す次の文章には、彼がカエンの一員であることが触れられている。「（彼は、）CKGR で生まれ、CKGR に居住するカエン・コミュニティのメンバーであるから、この問題を裁判にもち込む権利をもっている [Ditswanelo

16) コエンシャケネの「ガナ居住区」以外のヘッドマンやサブ・ヘッドマンの選出の過程では、「アヤコの系譜」に對抗する別の論理が展開されているところもある。これについては別稿で論じたい。

2002]」。また裁判の冒頭の自己紹介では次のように述べたと報じられた「私はカエン・バンドのメンバーであり、4 万年以上も前からセントラル・カラハリ地域に居住するサン先住民である [Botswana Daily News, July 22, 2004]」。彼は自分の父が、カエンの孫であることを説明し、コエンシャケネの「モラボ居住区」のサブ・ヘッドマンと同様に自らがカエンの系譜をひくことを説明する。その土地の先住民であることを主張するために系譜関係をもち出すのは先住民運動にみられる典型的な戦略でもある。このように「アヤコの系譜」は、さまざまな解釈の相違や見解の対立をふくみながらも、しだいにさまざまな政治的代表的者の正統性の根拠として、グイやガナ社会で定着しつつある。

しかし彼らの目指すところとは裏腹に、そうした彼らの選択は、植民地時代に確立したツワナを頂点とする「民族間の序例構造」を受け入れ、再生産する過程ともなりうる。そして創りだされた「アヤコの正統な系譜」は、これまで同じグイやガナとされてきた社会のなかに、新たな差異化の根拠をもち込むことになった。それは「アヤコの系譜」をひかない人々を、さらに周辺化する可能性をももっている。その意味では、ツワナへの同化の圧力に対抗し、独自の文化や社会の保全を主張する先住民運動さえもが、「アヤコの系譜」の論理を根拠として採用しているのは皮肉というより他ならない。むしろ先住民運動は、「平等主義社会」のイメージを乗り越え、「アヤコの系譜」をひく政治的代表的者を介した政治参加の道を模索するだけでなく、固定した政治的代表的者をもたない社会が、そのままの形を維持したまま、より広い社会の政治に参加する道をも模索すべきでないだろうか。かつてはバカラハリをもとりこみ、「平等主義的」で包含的な社会を形成していたグイやガナが、「アヤコの系譜」による差異化の論理を引き受けなければ、「国民」にも「先住民」にもなれないということにこそ、現代のサンが直面する最大の困難があるといえる。

謝 辞

本稿のもととなる調査は、21 世紀 COE プログラム「世界を先導する総合的地域研究拠点の形成」および公益信託澁澤民族学振興基金の助成によって実施された。またコエンシャケネ再定住地の皆様のあたたかいご協力が、この調査を支えてくださった。本稿の完成にあたっては、査読者の方々およびアジア・アフリカ地域研究研究科の諸氏に有益な助言と指導を賜った。ここに深く感謝いたします。

引 用 文 献

- Botswana Daily News. 2000 (October 03). Basarwa Want Representatives.
_____. 2004 (July 22). Sesana Takes the Witness Box.
Cassidy, L., K. Good, I. Mazonde and R. Rivers eds. 2001. *An Assessment of the Status of the San/Basarwa in Botswana*. Windhoek: Legal Assistance Centre.
Childers, G. 1982. Government Settlement or People's Community? In G. Childers et al. eds., *Government Settlement or People's Community?: A Study of Local Institutions in Ghanzi District*. Gaborone:

- Ministry of Local Government of Lands, pp.1-79.
- Chumbo, S. and K. Mmaba. 2002. *IXom Kyakyare Khwe, †Am Kuri Kx'ûi, the Khwe of the Okavango Panhandle: The Past Life, Part One: Origin, Land, Leaders and Traditions of the Bugakhwe People*. Shakawe: ToKADI.
- Ditshwanelo. 2002. Press Release III of the Negotiating Team, the Mandated Representatives of the Residents of the Central Kalahari Game. <http://www.ditshwanelo.org.bw/index/Current_Issues/Minority/CKGR%20Press%20Release%03%20-%2024%20Apr%2002.htm> (2006.10.30)
- English, M. 1980. “We, the People of the Short Blanket” (*Development Proposals Based on the Need and Aspiration of the Central Kalahari Game Reserve Population*). Ghanzi: Ghanzi District Council.
- Esche, H. 1977. *Interim Report on Survey of Basarwa in Kweneng*. Gaborone: Ministry of Local Government and Lands.
- Felton, S. 2002. “We Want Our Own Chief”: San Communities Battle against Their Image. In D. Lebeau and R. J. Gordon eds., *Challenges for Anthropology in the ‘African Renaissance.’* Windhoek: Typoprint, pp.55-67.
- Geingos, V. 2002. San, Land Rights and Development: Can San Survive without Land? *Paper Submitted at Indigenous Rights in the Commonwealth Project Africa Regional Expert Meeting, Indigenous Peoples of Africa Co-ordination Committee (IPACC) South Africa*. Cape Town.
- Guenther, M. 2002. Independence, Resistance, Accommodation, Persistence: Hunter-Gatherers and Agropastoralists in the Ghanzi Veld, Early 1800s to Mid-1900s. In S. Kent ed., *Ethnicity, Hunter-Gatherers and the “Other”: Association or Assimilation in Africa*. Washington, D.C.: Smithsonian Institution Press, pp.127-149.
- Gulbrandsen, O., M. Karlsen and J. Lexow. 1986. *Remote Area Development Programme: Report Submitted to the Royal Norwegian Ministry of Development Cooperation*. Gaborone.
- Hitchcock, R. K. 1982. Patterns of Sedentism among the Basarwa of Eastern Botswana. In E. Leacock and R. B. Lee. eds., *Politics and History in Band Societies*. Cambridge: Cambridge University Press, pp.223-267.
- Hitchcock, R. K. and J. D. Holm. 1993. Bureaucratic Domination of Hunter-Gatherer Societies: A Study of the San in Botswana, *Development and Changes* 24 (2): 305-338.
- Ikeya, K. 1999. The Historical Dynamics of the Socioeconomic Relationships between the Nomadic San and the Rural Kgalagadi, *Botswana Notes and Records* 31: 19-32.
- 池谷和信. 2004. 「ブッシュマンとカラハリ農牧民との交渉史」田中二郎ほか編『遊動民—アフリカの原野に生きる』昭和堂, 68-85.
- Kent, S. 2002. Autonomy or Serfdom?: Relations between Prehistoric Neighboring Hunter-Gatherers and Farmer/Pastoralists in Southern Africa. In S. Kent ed., *Ethnicity, Hunter-Gathers and the “Other”: Association or Assimilation in Africa*. Washington, D.C.: Smithsonian Institution Press, pp.48-92.
- Lee, R. B. 1979. *The !Kung San: Men, Women, and Work in a Foraging Society*. Cambridge: Cambridge University Press.
- . 1982. Politics, Sexual and Non-sexual in an Egalitarian Society. In E. Leacock and R. B. Lee eds., *Politics and History in Band Societies*. Cambridge: Cambridge University Press, pp.37-59.
- Le Roux, W. and A. White. 2004. *Voices of the San: Living in Southern Africa Today*. Cape Town: Kwela Books.
- Longden, C. 2004. *Undiscovered or Overlooked?: The Haïlom of Namibia and their Identity (†Au-†uihe*

- tama ge ha i, tamas kara- io !Nere !Kharube ge?: Hailoman Namibiab din tsi lis !Haosis*). Windhoek: Capital Press.
- Maruyama, J. 2004. The Impact of Resettlement on Livelihood and Social Relationships among the Central Kalahari San, *African Study Monograph* 24 (4): 223-245.
- Mazonde, I. N. 2004. Equality and Ethnicity: How Equal are San in Botswana? In R.K. Hitchcock and D. Vinding eds., *Indigenous Peoples' Rights in Southern Africa*. Copenhagen: Eks/Skolens, Trykkeri, pp. 134-151.
- 松田素二. 2005. 「土地の正しい所有者は誰か：知の政治学を超えて一東アフリカ・マサイ人の土地返還要求の事例」『環境社会学研究』11: 70-87.
- 峯 陽一. 2005. 「モレボローレと砂漠のフロンティアー1920 年代末の英領ベチュアナランドにおける遊動民の捕捉について」『二十世紀研究』6: 1-26.
- Ministry of Local Government, Lands and Housing. 1998. *National Settlement Policy*. Gaborone: Government Printer.
- 宮本正興・松田素二編. 1997. 『新書アフリカ史』講談社.
- 永原陽子. 1992. 「アパルトヘイトと『エスニシティ』ーナミビアの歴史から考える」『歴史科学と教育』11: 20-44.
- 大崎雅一. 1996. 「歴史的観点から見た !Gwi と !Gana ブッシュマンの現状ーセントラル・カラハリの事例より」『民族学研究』61 (2): 263-276.
- . 2001. 「セントラル・カラハリ年代記」田中二郎編『カラハリ狩猟採集民ー過去と現在』京都大学学術出版会, 71-114.
- Okihiro, G. Y. 2000. *A Social History of the Bakwena and Peoples of the Kalahari of Southern Africa, 19th Century*. New York: Edwin Mellen Press.
- Saugestad, S. 2001. *The Inconvenient Indigenous: Remote Area Development in Botswana, Donor Assistance, and the First People of the Kalahari*. Uppsala: Nordic Africa Institute.
- Sheller, P. 1977. *The People of the Central Kalahari Game Reserve: A Report on the Reconnaissance of the Reserve, July-September, 1976*. Gaborone: Basarwa Development.
- Silberbauer, G. B. 1982. Political Process in G/wi Bands. In E. Leacock and R. B. Lee eds., *Politics and History in Band Societies*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 23-35.
- Solway, J. S. 1987. *Commercialization and Social Differentiation in a Kalahari Village*. Ph.D. dissertation, University of Toronto.
- Suzman, J. 2000. *Things from the Bush: A Contemporary History of the Omaheke Bushmen*. Klosterberg: P. Schlettwein Publishing.
- 菅原和孝. 1998. 『会話の人類学』京都大学学術出版会.
- 田中二郎. 1971. 『ブッシュマン』思索社.
- . 1978. 『砂漠の狩人ー人類始原の姿を求めて』中央公論社.
- Traill, A. and H. Nakagawa. 2000. A Historical !Xóõ-Glui Contact Zone: Linguistics and Other Relations. In M. B. Herman and J. Tsonope eds., *The State of Khoesan Languages in Botswana*. Mogoditshane and Gaborone: Tasalls Publishing and Books for the Basarwa Languages Project, University of Botswana/ University of Tromsø Collaborative Basarwa Research Programme, pp. 1-17.
- !Useb, J. 2001. "One Chief is Enough!": Understanding San Traditional Authorities in the Namibian Context. In A. Barnard and K. Justin eds., *Africa's Indigenous Peoples: 'First Peoples' or 'Marginalized Minorities'?* Edinburgh: Centre of African Studies, University of Edinburgh, pp. 15-30.

Wilmsen, E. N. and J. Denbow. 1990. Paradigmatic History of San-speaking Peoples and Current Attempts at Revision, *Current Anthropology* 31: 489-524.

WIMSA. <http://www.wimsanet.org/advnet_sanrep.asp> (2006/10/30)